

# 人権侵害への不安を呼ぶ 日本の外国人犯罪データベース

原文：Japan's ethnic crime database sparks fears over human rights

Nature Vol.427(383)/29 January 2004; www.naturejpn.com/digest

David Cyranoski, Tokyo

**日**本では、犯罪現場から採取された生体物質を材料とした人種差別的な捜査方法が、犯罪捜査に欠かせない存在になろうとしている。このような動きに対しては、データが悪用され、外国人に的を絞った不当な取扱いにつながることを懸念する研究者や人権擁護運動家からの批判がある。

科学警察研究所(千葉県柏市)の法医学の研究者が構築する計画になっているデータベースでは、警察が容疑者の人種や外見の手がかりを得られるようになっており、4年間のプロジェクトで1億5,300万円の予算が注ぎ込まれている。

今回のプロジェクトを正当化する理由として、日本の当局者は、外国人による犯罪の増加を挙げる。また人種的指標は、偽造パスポートの出所を特定する研究とあいまって、「外国人が関与した犯罪の捜査に役立ち、このような犯罪の迅速な解決に資することによって犯罪の発生件数を減らし、社会不安を沈静化できる」と、今回のプロジェクトの概要に記されている。

これに対して、アムネスティ・インターナショナル日本事務局長の寺中誠は、このプロジェクトは「モラルの危機的状況を示している」と解釈する。アムネスティは長期間にわたって、日本の刑事訴追制度では有罪判決率が約99%という驚くべき高い数値であることに懸念を表明してきたが、このプロジェクトによってその懸念がますます強まると、寺中は言う。「日本の刑事訴追制度が、公正な取り調べと公正な裁判の点で国際水準まで高められることを私たちは望んでいる」

このデータベースには、種族、血液型、代謝酵素、毛髪の色、そして人種を区別するために利用できる皮膚の色素タンパク質、ミトコンドリアDNAや無症候性ウイルス感染の兆候などのデータが集められる。

DNAプロファイリングの場合のように、生

物的特徴を使って犯罪者の身元を特定することは、何ら目新しいことではない。しかし人種データが用いられるのは、通常、死体の損傷が激しい場合の身元確認だけだ。この日本でのプロジェクトは、人種プロフィールと個人のDNAとを初めて結びつける試みと考えられている。

数多くの日本人研究者は、公然とではないにせよ、このプロジェクトに対してアムネスティと同じ懸念を表明している。ある著名な遺伝学者は、本誌の取材に対して、このプロジェクトを「ばかげた」計画と一蹴したが、氏名を公表してコメントすることは拒否した。

さらには、法医学の研究者たちも心配している。死体の同定という研究内容をこのプロジェクトに転用されてしまうからだ。ある法医学者は匿名を条件に、「倫理面で少し厄介な問題が生じらさう。特に検査自体にある程度の不確実な要素が存在している場合には、人権侵害の恐れに配慮しなければならない」と語った。その反面、研究者たちは日本の当局者と同様、外国人による犯罪の増加が、このプロジェクトの正当事由となるとも考えている。

科学警察研究所の研究者たちは、この犯罪データベースが「外国人犯罪者や犯罪被害者の絞込みを行うためだけに利用され、特定の個人や種族を差別するために用いられるのではない」と力説する。だが日本では、社会問題や経済問題が起きると外国人をスケープゴートにするという行動パターンが見られ、今回のプロジェクトもこのパターン通りであると批判する者もいる。

19年間法務省に勤務し、現在は龍谷大学(京都府京都市)で刑事学を専門とする浜井浩一教授は、今回のプロジェクトによって、警察による犯罪捜査が外国人を中心に行われる傾向を助長するかもしれないと懸念する。「危険な偏見が生まれる可能性がある。殺人で検挙された外国人の数は、実は減少傾向にあり、2003年は41人だった」と、浜井は語る。これに対して強盗の場合、外国人が関与する事件は確かに増えているが、それでも外国人による強盗の検挙人員は4,151件中280件にすぎない。「バブル経済崩壊後の数年間で、外国人がスケープゴートにされてしまった」と、浜井は言う。 ■

## commentary

# オゾンホール報道の真実

科学者とマスコミは、複雑な現象をもっと誠実に一般市民に伝える努力をすべきだ。

原文：The hole truth

Nature Vol.427(289-291)/22 January 2004; www.naturejpn.com/digest

Susan Solomon

**南**極のオゾン層に「穴」が開いていることが1985年に初めて発見され、20世紀後半最大の環境問題の一つが始まりが周知の事実となった<sup>1</sup>。地球の南端で起きているオゾンの消失は、季節によって様相が大きく変化

することから一層注目を集めた。オゾン量は毎年8~9月(南極の春)に急激な減少を示し、オゾンホールは通常9月後半から10月前半までに最深となる。その後オゾンホールは、オゾンに富む周辺大気との混合によって1月末までにほぼ埋め戻され、次の春を迎える。 ▶